

論 文

女子大学生における居場所感覚の基底にある
心理学的機軸の探索 (IV)

—SNS (social networking service) 世界における居場所感覚—

¹ 諸 井 克 英 ² 岸 沙耶香³ 米 澤 美 幸 ⁴ 永 野 遥 果¹ 同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・特別任用教授² 同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2013年度卒業生³ 同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2015年度卒業生⁴ 同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2017年度卒業生The Exploration of Psychological Mechanism Underlying
Ibasyo Feeling in Female Undergraduates:

Relationships with Ibasho feeling in Social Networking Service universe.

¹Katsuhide Moroi ²Sayaka Kishi³Miyuki Yonezawa ⁴Haruka Nagano¹Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor²Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2013³Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2015⁴Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2017

Abstract

The present study explored the relationship between psychological deficiency in face-to-face situations and ibasyo feeling in Social Networking Service universe. Feelings of Unreality Scale (Moroi *et al.*, 2015a; Sunaga, 1996), Over-Adaptation Scale (Moroi *et al.*, 2015b; Ishizu & Ambo, 2008), and Ibasyo Feeling in SNS Universe Scale (Kishi & Moroi, 2011; revised to measure feeling in the SNS universe) were administered to female undergraduates ($N=563$). According to the partial correlation analyses and the multiple regression analyses, psychological deficiency in face-to-face situations led to negative ibasyo feeling in SNS universe, while induced positive ibasyo feeling. The significance of research on the psychological mechanism underlying ibasyo feeling in SNS universe was discussed.

Key word: ibasyo feeling, social networking service, a feeling of unreality, over-adaptation.

I. 問題

諸井（2004）は、2000年代初頭にわが国で飛躍的普及を遂げた携帯電話機が若者の対人コミュニケーションにおよぼした影響について論じた。その際、この携帯電話機に装備されたメール機能が重要な役割を果たしていることを指摘した。つまり、潜在的な情報伝達力の点では劣位であるはずの文字コミュニケーションへの「不可思議」な回帰が生じたのである。また、小林・池田（2005）は、携帯メールが「若年層の情報環境を私的な領域に収縮」させることを実証的調査によって明らかにした。10年後のスマートフォンの普及は、携帯メールがもたらした対人関係の変容をさらに進化させた。

わが国の通信機器普及の状況に関する総務省の報告によると、次のような特徴が指摘されている（総務省、2017）。スマートフォンの個人保有率を見ると、'11年に14.6%であったものが'16年には56.8%と「爆発的普及」を示している。とりわけ、20代の保有率は'16年で94.2%であり、大半の若者がスマートフォンを保有している。スマートフォンの普及と連動しているのがSNS（social networking service）の利用である。SNS利用率は、'12年には41.4%であり'16年には71.2%とかなり増加している。年代別に見ても20代は97.7%でほぼ全員がSNSを利用している。インターネット利用状況においても、パソコン利用率は横ばい傾向（'14年58%、'15年57%、'16年59%）で、スマートフォンは増加傾向（47%、54%、58%）にある。このように、スマートフォンの普及は、単にインターネット機能の充実だけでなく、SNSという新たな人と人のつながりのツールを内包することにより、コミュニケーション行動を変容させているのである。

本研究では、以上に述べたように、若者におけるスマートフォンの普及とSNS利用の現状（総務省、2017）を踏まえ、SNS世界の中でどのように居場所が形成されているかを明らかにする。さらに、SNSにおける居場所感覚が

対面生活での心理的不全とどのような関連があるかも検討する。

日常生活における居場所の問題を論じた藤竹（2000）によれば、次の3種類の居場所が存在する。①社会的居場所〈自分が他人によって必要とされ、自分の資質や能力を社会的に発揮することができる〉、②人間的居場所〈自分であることをとり戻すことができ、安らぎを覚えたり、はっとすることのできる〉、③匿名的場所〈群衆の一員となり、匿名的な状況になると、今までの自分から抜け出せることから、かえって自分をとり戻すことができる〉。とりわけ、③は、スマートフォンやSNSによるコミュニケーションが定着した現在では重要であろう。岸・諸井（2012）は、居場所感覚を「特定の生活領域に対する態度や感情全体」と定義し、大学生活に限定して居場所感覚を測定した。その結果、2研究で（岸・諸井、2012；諸井・坂上・野島・岡本、2015）、「被受容感」、「精神的安定感」、「自己疎外感」、「自己没入感」、および「自己有用感」という側面が抽出された。したがって、SNS世界に限定して居場所感覚を測定するとどのような次元性が得られるのかを検討する必要がある。これを本研究の第1の目的とする。

ところで、対面場面での様々な心理的不全感とはSNS世界での心理的状态にどのような影響をおよぼすだろうか。論理的には次の3つの関係が考えられる。a)対面場面での心理的不全感とはSNS世界での心理的状态にもそのまま持ち越される。b)対面場面ですべての心理的不全感を抱えているほど、SNS世界では逆に肯定的な心理的状态が引き起こされる。c)2種類の世界での心理的状态は独立である。

a)については、SNS世界が匿名性を帯びていたとしても、対面場面でも何らかの心理的不全感を抱えている当事者にも一定の原因がある。したがって、匿名の世界でも対人的衝突や不満感が引き起こされることになる。

高橋・伊藤（2016）は、TwitterやLINEの利用時の行動尺度を作成し、男女大学生に実

施した。因子分析やクラスター分析によって利用者が次の3群に大別された。① SNSにおけるヘビーコミット群、② SNSにおける関係配慮群、③ SNSに対する義理登録群。これら3群間で性格特性の比較を行うと、SNSにおけるヘビーコミット群で「情緒不安定性」や「誠実性のなさ」が高い傾向が見られた。これは、日常的な不全傾向がSNS世界での行動に持ち越されていることを示唆している。

小島(2016)は、男女大学生のLINEの営みと日常での賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連を検討した(LINE利用者の割合はきわめて高かった; 413名中409名)。拒否回避欲求が高い者について次の傾向が得られた。①交友の初期場面でLINEのアカウント交換を最初に行いがちである、②対面場面で接触のある場合には、LINE上で相手との関係を切ることなく、相手からのメッセージに応答し続ける。つまり、対面場面での欲求がLINEでの行動に持ち越されているのであろう。

男女大学生を対象としてSNSへの不適切発言や不適切写真投稿経験を検討した大和田・御幸(2017)によれば、SNSでの不適切な行動は、対面場面での不適切行為やSNS上に見られる不適切行為に対する許容度と無関係であった。しかし、対面場面での不適切発言経験は、SNSでの不適切写真投稿経験やSNSへの不適切発言投稿経験を有意に促進していた。この研究は、対面世界での行動とSNS世界における行動との間の正の関連を示しており、①の考えと一致しているといえよう。

②については、SNS世界は直接の対人的接触を必要としないので、自分に都合の悪い部分を隠すこと、すなわち自己隠蔽が可能となる。自己隠蔽とは、「否定的もしくは嫌悪的と感じられる個人的な情報を他者から積極的に隠蔽する傾向」である(河野, 2000)。SNS世界での自己隠蔽の容易さのために、対面場面での心理的不全がSNS世界での動機づけに変換され、適応的な心理的状态が生じやすいことになる。

本多(2016)は、男女大学生に「24時間以

内でhappyだったできごと」を授業を利用して15回ほど自由記述させ、テキストマイニングによって分析した。その結果、「携帯」関連用語(スマートフォン、携帯電話、Eメール、SNS、LINE、Facebookなど)の出現頻度は、高い方から数えて全対象者および男性では14番目、女性では11番目であった。友だちとの直接的な関わりが日常的なポジティブイベントの上位を占めていた。大学生にとってSNSは必ずしも幸福感をもたらす世界ではないのである。

2つの世界での心理的状态が独立であるという③の考えは、当事者は対面場面とSNSの世界を区別しており、①のような対面場面における心理的不全のSNS世界への持ち越しも、その逆である②の傾向も生じない。

黒川・吉武・中山・三島・大西・吉田(2015)は、同一専攻所属の男女大学新生を5月上旬から12月中旬まで5回に亘る縦断調査を行った。その結果、入学時の早い段階で形成される交友が継続され、その相手と一定の対面的コミュニケーションとSNSを介したコミュニケーションを営んでいた。これらは、大学での対面コミュニケーションが友人関係満足感につながることを示していた。この研究は、大学新生の初期の対人的適応においてはSNS世界が補完的役割を果たしているに過ぎないことを示唆している。

藤野(2017)は、webアンケートを利用して、日常生活とSNS世界での2種類の居場所感覚(自己有用感、本来感)を測定した。本来感では日常生活とSNS世界で差がなかったが、自己有用感は日常生活のほうが有意に高い傾向が見いだされた。また、日常の心理的健康との関係を見ると、日常生活では2つの居場所感覚ともに有意な正の相関が一般的に得られたが、SNS世界では関連が希薄であった。藤野による知見は、対面的生活とSNS世界との独立性を示唆している。

本研究では、対面場面での心理的不全として、非現実感傾向および過剰適応傾向を取り上げる。

須永 (1996) は、精神疾患としての離人感・現実感消失障害 (depersonalization/derealization disorder; American Psychiatric Association, 2013) の症状を健常者も日常的に一定程度経験すると考えた。その上で、この症状の中核の状態である現実感消失つまり「何らかの対象が現実のものと実感されない」経験の程度を測定するために非現実感質問紙を作成した。

他方、過剰適応傾向は、学校社会での不登校や「キレル」現象などに対する臨床的取り組みを契機として実証的研究が盛んになった。この過剰適応傾向については様々な定義が存在するが (浅井, 2012), 次の定義に収斂されている。「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や欲求に応える努力を行うこと」 (石津・安保, 2008)。

対面世界と SNS 世界それぞれにおける心理的状态の関連についての先述した④から⑥の考えのうち、⑥の考えに基づいて非現実感傾向および過剰適応傾向と SNS における居場所感覚との関係に関する仮説を立案しよう。まず、日常の世界に対して現実感消失傾向に陥っている者は、SNS という匿名性が強い状況に入り込んだときには自己に対する意識や置かれている対人的環境を比較的自在に明確にできる。したがって、次の仮説が導かれる。

仮説 I-a: 対面世界での非現実感傾向が高い者は、SNS 世界で肯定的な居場所感覚を抱くだろう。

日常的に過剰適応傾向が高い者は、SNS 世界では周囲からの期待に敏感になることなく比較的自由に自己表現できる可能性がある。つまり、SNS 世界は、心理的に居心地のよい場所となる。このように考えれば、次の仮説が成り立つだろう。

仮説 I-b: 対面世界での過剰適応傾向が高い者は、SNS 世界で肯定的な居場所感覚を抱くだろう。

以上の仮説を検討するために、対面世界での

不全傾向である非現実感傾向と過剰適応傾向に加え、SNS における居場所感覚を測定する質問紙を女子大学生に実施した。

II. 方法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、質問紙調査を実施した (調査 1: 2013 年 5 月 30 日, 6 月 10 日; 2015 年 4 月 20 日 / 調査 2: 2017 年 4 月 24 日; 記入時間は約 20 分)。回答にあたっては匿名性を保証し、質問紙実施後に本調査の目的と社会心理学における研究上の意義や有意性を簡潔に説明した。青年期の範囲を逸脱している者 (25 歳以上) を除き、以下の尺度に完全回答した女子学生 563 名を分析対象とした。回答者の平均年齢は 19.67 歳 ($SD=.81$, 19~23 歳) であった。各調査の回答者の学年別内訳を表 1 に示す。

表 1 回答者の内訳—学年—

	[学年]			合計
	2 年	3 年	4 年	
2013 年	100	90	17	207
2015 年	146	44	7	197
2017 年	93	59	7	159
合計	339	193	31	563

質問紙の構成

質問紙の構成は以下の通りである。調査 1 では、質問紙は、①非現実感傾向尺度、② SNS における居場所感覚尺度、調査 2 では、①過剰適応傾向尺度、② SNS における居場所感覚尺度からそれぞれ構成されている。さらに、2 調査ともに、回答者の基本属性に加え、SNS の利用状況に関する設問を含んでいる。

1. 非現実感傾向尺度

回答者が日常的に抱いている「何らかの対象が現実のものと実感されない」経験の程度である非現実感傾向を測定するために、諸井・足立・福田 (2015) による非現実感傾向尺度を用いた (48 項目; 諸井ら (2015a) の表 1-a, 付表 1 参照)。この尺度は、須永 (1996) の非

現実感質問紙のうち特性非現実感尺度に従って作成された。本研究では、諸井ら(2015)と同様に、この6ヵ月間の被験者の状態や気持ちを想起させ、各項目が表す状態にあてはまる程度を4点尺度で回答させた(「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。

2. 過剰適応傾向尺度

日常生活における回答者の過剰適応傾向を測定するために、石津・安保(2008)に基づき諸井・坂上・野島・岡本(2015b)が作成した過剰適応傾向尺度(26項目; 諸井ら(2015b)の表1-a, 付表1参照)を利用した。26項目それぞれについて「この6ヵ月間のあなたの気持ち」にあてはまるかどうかを4点尺度で回答させた(「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。

3. SNSの利用状況に関する設問

Facebook, Twitter や mixi など様々な SNS を回答者が日頃どのくらい利用しているかを尋ねた。発信・受信や閲覧などを含めて全体としての利用度を5点尺度で回答させた(「4. 一日のうちで頻繁に利用する。」「3. 一日のうち必ず一度は利用する。」「2. 一週間に数回は利用する。」「1. ほとんど SNS を利用しない。」「0. まったく SNS を利用しない。」)。

4. SNSにおける居場所感覚尺度

居場所感覚に関する岸・諸井(2011)による定義(「特定の生活領域に対する態度や感情全体」)を応用し、SNSにおける居場所感覚を「SNS利用に対する態度や感情全体」と定義し

た。岸・諸井が作成した尺度項目(60項目)を SNS 利用時の態度や感情に表すように改変した(表5-a, 付表1参照)。SNS 利用時の回答者の様子を思い浮かべさせ、60項目それぞれがあてはまる程度を4点尺度で評定させた(「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。

Ⅲ. 結果

SNSの利用状況と回答者の限定

表2には SNS の利用状況を調査年別に示した。「4. 一日のうちで頻繁に利用する」者は、全回答者の70.1%を占めたが、その割合は最近の2度の調査でもっと増加していた(2013年64.3%, 2015年73.1%, 2017年75.5%)。また、一元配置分散分析によって平均値比較を試みると、同様に「2013年<2015年÷2017年」の有意な傾向が見られた。SNSにおける居場所感覚尺度については、SNSを少なくとも1週間に1度は利用する者541名に限定した(「4. 一日のうちで頻繁に利用する。」「3. 一日のうち必ず一度は利用する。」「2. 一週間に数回は利用する。」)。なお、調査1の非現実感尺度や調査2の過剰適応傾向尺度は SNS 利用と関わりなく個人的傾性を測定しているため、分析対象数が異なる(調査1,404名; 調査2,159名)。

各尺度の検討

1. 分析の手続き

3尺度それぞれで項目水準での検討を行い、

表2 SNSの利用頻度—調査年別—

	[調査年度]		
	2013年 <N=207>	2015年 <N=197>	2017年 <N=159>
0. まったく SNS を利用しない	8	1	1
1. ほとんど SNS を利用しない	4	3	5
2. 一週間に数回は利用する	10	6	3
3. 一日のうち必ず一度は利用する	52	43	30
4. 一日のうちで頻繁に利用する	133	144	120
	$m=3.44a$ $SD=0.96$	$m=3.65b$ $SD=0.66$	$m=3.65b$ $SD=0.73$
	[一元配置分散分析] $F_{(2,560)}=4.68, p=.010$		

m : 平均値; SD : 標準偏差値

平均値に付した異なる英文字は互いに有意に異なることを示す (Bonferroni の法; $p<.05$)

項目平均値の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と標準偏差値 ($SD \geq .60$) のチェックをし、不適切な項目を除去した。ただし、非現実感傾向尺度の場合には項目内容から否定的方向への回答の偏りが生じるはずなので、標準偏差値のチェックのみに限定した。次に、残りの項目を対象に因子分析(最尤法、プロマックス回転 ($k=3$))を行った。まず、初期解での初期共通性を算出し、値が低い項目 ($< .25$) を除いた。

残りの項目を分析対象として、初期因子固有値 ≥ 1.00 を充たす解をすべて求め、適切な解を探索した。その際、①特定因子への負荷量が十分に大きく(絶対値 $\geq .40$)、②他因子への負荷が小さい(絶対値 $< .40$) という基準を設定した。各項目が単一の因子にのみ .40 以上の負荷量を示すように項目を削除しながら①と②の基準を充たすまで分析を反復した。明確な因子パターンが得られる解を採用した。因子分析の結果に基づいて、各因子への負荷量を基準(絶対値 $\geq .40$) に項目を選別し、因子概念に一致した方向に得点が高くなるように得点調整をしたうえで下位尺度項目を構成した。下位尺度ごとに、1次元性の確認を行い(項目-全体相関分析, α 係数)、構成項目の平均値を下位尺度得点とした。

2. 非現実感傾向尺度

項目水準の結果、9項目が不適切であり ($SD < .60$; $real_a_10, real_c_2, real_d_2, real_d_3, real_d_7, real_d_8, real_d_10, real_e_1, real_e_2$ (項目番号は諸井ら (2015a) と同じ)), 残りの39項目を対象とした。2~6因子解が算出可能であり、明確な解釈が可能であった3因子解を採用したが、諸井ら (2015a) による結果との対応が不明確であった。もともと須永 (1996) はこの尺度を単次元尺度として扱っているので、本研究でも単次元性の検討を行った。39項目を対象として、①主成分分析による第I主成分の説明率と未回転第I主成分負荷量、②当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値と Cronbach の α 係数値を吟味した。不適切な項目を除き、34

項目で①と②の点で十分な単次元尺度が得られた(表3)。これら34項目の平均値を非現実感傾向得点とした。この得点は尺度中性点(2.5)よりも有意に低く、調査対象が健常サンプルであることを表している。

なお、この得点を SNS の非利用者(「1. ほとんど SNS を利用しない。」、「0. まったく SNS を利用しない。」)と利用者(「4. 一日のうちで頻繁に利用する。」、「3. 一日のうち必ず一度は利用する。」、「2. 一週間に数回は利用する。」)で比較したが、有意差はなかった(非利用者: $m=1.76, SD=0.76, N=16$; 利用者: $m=1.58, SD=0.53, N=388 / t_{(15.61)}=.92, ns.$)。

3. 過剰適応傾向尺度

項目水準では平均値で1項目 ($m \div 3.5$; $over_a_1$), 初期共通性で1項目(共通性 < 2.5 ; $over_c_6$) が不適切であったので、残りの24項目を対象に2~6因子解を求めた。明確な解釈が可能な4因子解を採用した。2つの因子は、石津・安保 (2008) の結果にほぼ対応しており、「Ⅱ. 期待に添う努力」、「Ⅲ. 人からよく思われたい欲求」と名づけた。石津・安保の「自己抑制」は、他者への表出を抑える側面と自分の本心と不一致な行動に関わる抑制の側面に分離し、それぞれ「Ⅰ. 自己抑制」、「Ⅳ. 感情抑制」と命名した。しかしながら、「Ⅳ. 感情抑制」では α 値が低かった (.53)。

そこで、分析をやり直し、3因子解を求めたところ(表4-a)、「Ⅰ. 自己抑制」、「Ⅱ. 期待に添う努力」、「Ⅲ. 人からよく思われたい欲求」が現れ、下位尺度の検討も良好であった(表4-b)。3つの下位尺度得点を反復測定分散分析によって比較すると、「Ⅰ. 自己抑制 \div Ⅱ. 期待に添う努力 $<$ Ⅲ. 人からよく思われたい欲求」という有意差が得られた。先行研究とほぼ同じ傾向であった(諸井ら (2015b) ; 「期待に添う努力 \div 自己抑制 $<$ 他者配慮 $<$ 人からよく思われたい欲求」)。

なお、下位尺度得点を SNS の非利用者と利用者(先述した分類)で比較したが、いずれも有意差は検出されなかった(「Ⅰ. 自己抑制」:

表3 非現実感覚尺度に関する単一次元性の検討

	(a)	(b)
real_a_1	.63	.60
real_a_3	.62	.59
real_a_4	.60	.56
real_a_5	.68	.65
real_a_7	.64	.61
real_a_8	.72	.68
real_b_1	.69	.67
real_b_2	.68	.66
real_b_3	.69	.65
real_b_4	.69	.65
real_b_5	.76	.74
real_b_6	.68	.66
real_b_7	.77	.74
real_b_8	.64	.62
real_b_9	.63	.61
real_b_10	.68	.66
real_c_1	.69	.65
real_c_3	.68	.65
real_c_4	.74	.71
real_c_5	.55	.53
real_c_6	.63	.60
real_c_7	.62	.60
real_c_8	.60	.58
real_c_9	.62	.61
real_c_10	.67	.65
real_d_4	.55	.54
real_d_5	.59	.56
real_d_6	.77	.75
real_d_9	.64	.61
real_e_3	.62	.60
real_e_4	.67	.64
real_e_5	.70	.68
real_e_6	.74	.71
real_e_7	.67	.65
第 I 主成分説明率 44.24% $\alpha=.96$ (c)		
$m=1.59, SD=.54$; 尺度中性点 (2.5) との比較 $t_{(403)}=33.85, p=.001$; 正規性検定 (d) .14, $p=.001$		

N=404

(a): 主成分分析における未回転第 I 主成分負荷量

(b): 当該項目と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値 (すべて $p<.001$)(c): Cronbach の α 係数値

(d): Kolomogorov-Smirnov の検定 (Lilliefors の修正)

非利用者 $m=3.03, SD=0.68, N=6$; 利用者: $m=2.78, SD=0.61, N=153; t_{(157)}=.99, ns.$ / 「Ⅱ. 期待に添う努力」: 非利用者 $m=2.81, SD=0.19, N=6$; 利用者: $m=2.85, SD=0.50, N=153; t_{(8,11)}=.43, ns.$ / 「Ⅲ. 人からよく思われたい欲求」: 非利用者 $m=3.13, SD=0.47, N=6$; 利用者:

$m=3.26, SD=0.50, N=153; t_{(157)}=.65, ns.$)。

4. SNS における居場所感覚尺度

事前の項目検討によると平均値で 1 項目 ($m<1.5$; sns_d_3), 初期共通性で 1 項目 (共通性 <2.5 ; sns_a_1) が不適切であった。残りの 58 項目を対象に算出可能な 2~9 因子解を

表 4-a 過剰適応傾向尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果—一回転後の因子負荷量—

		*	I	II	III
〔I. 自己抑制〕					
over_b_4	私は、心の中で思っていることを人に伝えないことが多い。	自	.82	-.03	-.03
over_a_4	私は、自分の気持ちを抑えてしまうほうだ。	自	.79	.06	.04
over_a_8	私は、自分が思っていることを口に出さないようにする。	自	.76	.11	.01
over_c_3	私は、相手と違うことを思っている、それを相手に伝えないことが多い。	自	.68	-.16	.08
over_b_8	私は、自分が考えていることをすぐには言わないようにする。	自	.61	.11	-.08
over_a_9	私は、自分の意見を無理に通すことはしない。	自	.60	-.07	-.05
〔II. 期待に添う努力〕					
over_c_5	私は、自分の価値がなくなってしまうのではないかと心配になり、がむしゃらに頑張る。	期	-.00	.69	-.09
over_a_10	私は、期待には応えなくてはいけないと思う。	期	-.04	.68	.07
over_c_4	私は、とにかく人の役に立ちたいと思う。	他	-.14	.65	-.01
over_c_2	私は、期待に応えるために、成績をあげるように努力する。	期	-.01	.63	-.03
over_c_1	私は、まわりの人からの要求に敏感なほうである。	期	.09	.56	.03
over_b_2	私は、まわりの人からの期待を敏感に感じている。	期	.01	.54	.10
over_a_5	私は、自分が少し困っても、相手のために何かしてあげることが多い。	他	.02	.51	.01
over_a_2	私は、まわりの人から「能力が低い」と思われないように頑張る。	期	.17	.45	.01
〔III. 人からよく思われたい欲求〕					
over_a_7	私は、まわりの人から気に入られたいと思う。	人	-.02	-.04	.93
over_b_7	私は、自分をよく見せたいと思う。	人	-.04	-.07	.69
over_b_3	私は、まわりの人から認めてもらいたいと思う。	人	-.08	.26	.53
over_a_3	私は、相手に嫌われないように行動する。	人	.25	.09	.48
〔因子相関〕					
		I	***	.23	.26
		II		***	.41
		III			***

N=159

適合度検定: $\chi^2_{(102)}=153.11, p=.001$

初期固有値 >1.69; 初期説明率 53.82%

*: 石津・安保 (2008) との対応 (他者配慮, 期待に沿う努力, 人からよく思われた欲求, 自己抑制)

表 4-b 過剰適応傾向における下位尺度の検討

	項目相関 (a)	信頼性係数値 (b)	平均値 (c)	標準偏差	正規性検定 (d)
I. 自己抑制	$r=.52-.74$	$\alpha=.86$	2.79 b	0.61	.10, $p=.001$
II. 期待に添う努力	$r=.47-.73$	$\alpha=.77$	2.85 b	0.49	.07, <i>ns.</i>
III. 人からよく思われたい欲求	$r=.43-.62$	$\alpha=.81$	3.26 a	0.50	.13, $p=.001$
〔反復測定分散分析〕		$F_{(1.83,289.13)}=50.16, p=.001^*$			

N=159

(a): 当該項目と当該項目を除くピアソン相関値 ($p<.001$)(b): Cronbach の α 係数値(c): 異なる英文字は互いに有意に異なることを示す (Bonferroni の法; $p<.05$)。

(d): Kolmogorov-Smirnov の検定 (Lilliefors の修正)

*: Greenhouse-Geisser の修正

検討し、明確な解釈が可能な 5 因子解を採用した (表 5-a)。第 II 因子、第 III 因子、および第 IV 因子は、岸・諸井 (2011) の結果にほぼ対応していたので、それぞれ「II. 自己疎外感」、「III. 被受容感」、「IV. 自己有用感」と名づけた。第 I 因子は、岸・諸井の「精神的安定

感」と「自己没入感」に関する項目から構成され、「I. 心理的充足感」とした。第 V 因子は、SNS という空間におけるいまごつきを表す項目から構成されているので、「V. 戸惑い」と命名した。

5 つの下位尺度の検討を行うと適切な値が示

表 5-a SNS における居場所感覚尺度に関する因子分析(最尤法, プロマックス回転($k=3$))の結果—回転後の因子負荷量—

		*	I	II	III	IV	V
(Ⅰ. 心理的充足感)							
sns_e_7	SNS を利用することで、私は生き生きとできる。	精	.84	-.10	-.07	.11	.06
sns_d_5	SNS を利用していると、私はほっとできる。	精	.81	.02	-.10	.04	.05
sns_e_1	SNS を利用していると、私はくつろげる。	精	.79	-.10	-.13	-.07	-.02
sns_e_8	SNS を利用することで、私は安定した気持ちになる。	精	.79	-.07	-.06	.11	.04
sns_d_6	SNS を利用していると、私は自分自身を実感できる。	×	.71	.06	-.04	.18	.09
sns_a_5	SNS で交流することで、私はリラックスできる。	精	.70	-.03	.11	-.01	.01
sns_e_2	SNS を利用していると、私は自分を見失わないでいられる。	×	.66	-.02	-.11	.23	.05
sns_c_3	SNS の画面を閲覧していると、私は安心できる。	精	.61	.14	.04	-.05	.02
sns_c_7	SNS を利用しているときには、ありのままの私を出せる。	精	.61	-.00	.12	-.02	-.10
sns_c_1	SNS で何か書き込んでみると、ありのままの私でいられる。	精	.59	.02	.07	-.01	-.10
sns_a_6	SNS を閲覧することで、私だけの時間がもてる。	没	.58	.07	.07	-.08	-.04
sns_f_9	SNS を利用する際、私は自由な感じがする。	×	.57	-.10	.05	.06	-.11
sns_c_9	SNS を通した交流に、居心地の良さを感じる。	精	.56	.02	.28	-.04	-.01
sns_f_2	SNS で交流していると、私はやりがいを感じる。	没	.53	.04	.12	.23	-.03
sns_b_2	SNS でだけかと交流することによって、夢中になれるものを見つけることができる。	没	.53	.06	.17	.08	-.05
sns_b_7	SNS を利用していると、私は楽しくなる。	精	.48	-.05	.32	-.23	-.11
sns_f_4	SNS を利用することで、私は自分の好きなものを見つけることができる。	没	.47	.02	.14	-.08	.01
sns_b_8	SNS を利用していると、私自身のことについて考えることができる。	没	.46	.19	.16	-.11	.04
sns_c_4	SNS の画面を見てみると、私は物思いにふけることができる。	×	.45	.35	.02	-.12	-.04
sns_f_7	SNS を通した交流に、私は満足している。	×	.42	-.21	.28	-.04	-.03
(Ⅱ. 自己疎外感)							
sns_c_5	SNS を利用していると、私は一人ぼっちであると感じる。	疎	.05	.82	-.08	-.01	-.20
sns_a_7	SNS を閲覧しているときに、私は自分が孤立している感じがする。	疎	.06	.75	-.04	.03	-.05
sns_c_8	SNS を利用していると、私はさびしくなる。	疎	-.02	.75	.03	-.01	-.06
sns_d_1	SNS を利用していると、私の居場所がない感じがする。	疎	-.03	.72	.03	-.03	.07
sns_c_2	SNS の画面を閲覧していると、私は落ち込みがちになる。	疎	-.11	.71	.01	.10	-.05
sns_b_9	SNS を利用しているときに、私は無視されている感じがすることがある。	×	.09	.64	-.02	.04	-.07
sns_d_4	SNS を利用していると、私の考えや悩みを誰にも分かってもらえない感じがする。	被	.02	.59	-.03	.04	.17
sns_b_3	SNS を利用しているときに、私は SNS の人たちから自分が必要とされていないような気がする。	×	.16	.59	-.06	.01	.06
sns_f_5	SNS で交流しようとしても、私はまわりの人の輪になかなか入れない。	疎	.05	.54	-.08	-.09	.20
sns_e_3	SNS を利用していると、ストレスを感じる。	疎	-.16	.50	.04	.09	.16
sns_f_10	SNS での交流しているときに、私はまわりの人から受け入れられていない気がする。	疎	.16	.50	-.06	.12	.15
sns_e_6	SNS での交流は、私の思い通りにできないことが多い。	疎	-.02	.46	.19	-.03	.21
sns_a_4	SNS での交流は、私にとって居心地が悪い。	×	-.21	.43	-.03	.16	.11
(Ⅲ. 被受容感)							
sns_b_10	私が利用している SNS には、私を大切にしてくれる人がいると感じる。	被	-.06	-.01	.81	.11	.04
sns_b_5	私が利用している SNS には、私の存在を認めてくれる人がいる。	被	-.09	.02	.75	.00	.08
sns_a_8	SNS で交流している人の中に、私の悩みを聞いてくれる人がいる。	被	-.04	-.02	.71	.19	-.09
sns_e_10	SNS の中には、私のことを気にかけてくれる人がいる。	被	.02	-.03	.68	.13	.10
sns_d_8	SNS の中には、私を受け入れてくれる人がいる。	被	.14	-.07	.61	.13	.07
sns_a_2	SNS では、私を本当に理解してくれる人がいる。	被	.04	.03	.59	.12	-.15
sns_e_4	SNS の中には、私と気持ちが通じ合う人がいる。	被	.21	-.07	.54	.09	.08
sns_b_4	SNS を用いることで、誰かと交流できる。	被	.21	-.03	.54	-.08	.06
sns_b_6	私が利用している SNS には、私と同じ考え方や価値観をもっている人がいる。	被	.28	.06	.51	-.11	.02
(Ⅳ. 自己有用感)							
sns_a_9	いつも利用している SNS から私が抜けると、困る人がいる。	有	-.04	.08	.29	.54	-.12
sns_a_3	SNS では私がいないと、さびしがる人がいる。	×	.04	.12	.35	.52	-.11
sns_e_5	SNS で交流していると、私は頼りにされている。	有	.17	.02	.34	.46	.04
(Ⅴ. 戸惑い)							
sns_d_7	私には、SNS で何をしようかの迷うことがある。	没	.04	.31	.04	-.12	.65
sns_e_9	SNS を利用して、私は何をしようか分からない。	×	-.13	.28	.01	-.00	.53
sns_f_1	SNS で交流しようとする、私はまごつくことが多い。	疎	-.04	.34	.07	-.08	.45
[因子相関]							
		I	***	.06	.56	.18	-.27
		II		***	.03	.1	.24
		III			***	.17	-.17
		IV				**	.18

N=541

適合度検定: $\chi^2_{(86)}=1950.46, p=.001$

初期因子固有値 > 1.35; 初期説明率 52.99%

*: 岸・諸井 (2011) との対応 (被受容感, 精神的安定感, 自己疎外感, 自己没入感, 自己有用感; 残余項目: ×)

表 5-b SNS における居場所感覚下位尺度の検討

	項目相関 (a)	信頼性係数値 (b)	平均値 (c)	標準偏差	正規性検定 (d)
I. 心理的充足感	$r=.45-.75$	$\alpha=.94$	2.33 b	0.59	.04, $p=.024$
II. 自己疎外感	$r=.45-.70$	$\alpha=.90$	1.91 d	0.55	.06, $p=.001$
III. 被受容感	$r=.59-.74$	$\alpha=.90$	2.57 a	0.66	.08, $p=.001$
IV. 自己有用感	$r=.51-.62$	$\alpha=.74$	1.73 e	0.60	.15, $p=.001$
V. 戸惑い	$r=.49-.62$	$\alpha=.74$	2.17 c	0.76	.13, $p=.001$
[反復測定分散分析]		$F_{(2,28,1258,09)}=190.258, p=.001$			

$N=553$

(a): 当該項目と当該項目を除くピアソン相関値 ($p<.001$)

(b): Cronbach の α 係数値

(c): 異なる英文字は互いに有意に異なることを示す (Bonferroni の法; $p<.05$)。

(d): Kolomogorov-Smirnov の検定 (Lilliefors の修正)

された (表 5-b)。構成項目の平均値を下位尺度得点とした。反復測定分散分析によって、「IV. 自己有用感 < II. 自己疎外感 < V. 戸惑い < I. 心理的充足感 < III. 被受容感」という有意差が検出された。大学生活を対象とした岸・諸井 (2011) でも大まかに同様の傾向があった (「自己疎外感 < 自己有用感 < 自己没入感 ÷ 精神的安定感 < 被受容感」)。

非現実感覚傾向と SNS における居場所感覚との関係

日常生活で抱く非現実感覚傾向が SNS を利用したときに形成される居場所感覚とどのような関係にあるかを検討するためにピアソン相関

分析と利用頻度を統制変数とする偏相関分析を行った (表 6)。

2つの分析ともに、非現実感覚は、「II. 自己疎外感」および「V. 戸惑い」との間に有意な正の相関値を示した。これは、日常の非現実感覚傾向が SNS の利用によって肯定的な居場所感覚につながるのではなく、むしろ逆であることを示唆した。したがって、仮説 I-a は棄却された。しかし、「I. 心理的充足感」では、偏相関分析でのみ有意な正の相関値が見られた。利用頻度の高さを媒介させると、仮説 I-a と一致して日常の非現実感覚が高いほど SNS において高い心理的充足感が得られることになる。

表 6 非現実感覚傾向と SNS における居場所感覚との関係
—ピアソン相関値と偏相関値—

[SNS における居場所感覚]	非現実感覚傾向	
	[ピアソン相関値]	[偏相関値]*
I. 心理的充足感	.10	.12 $p=.014$
II. 自己疎外感	.46 $p=.001$.46 $p=.001$
III. 被受容感	-.01	.01
IV. 自己有用感	.07	.08
V. 戸惑い	.30 $p=.001$.29 $p=.001$

$N=395$

* 統制変数：利用頻度

過剰適応傾向と SNS における居場所感覚との関係

日常生活での過剰適応傾向が SNS を利用したときに形成される居場所感覚とどのような関係にあるかを検討するために重回帰分析を行った(表7)。重回帰分析では、過剰適応傾向3得点と利用頻度を独立変数とし、SNSにおける居場所感覚5得点それぞれを従属として、ステップワイズ法(投入基準 $p < .05$; 除去基準 $p > .10$)を用いた(ピアソン相関値は付表2)。

それぞれの分析で「Ⅲ. 人からよく思われたい欲求⇒Ⅲ. 自己疎外感」, 「Ⅰ. 自己抑制⇒Ⅳ. 自己有用感」, 「Ⅰ. 自己抑制⇒Ⅴ. 戸惑い」という正の影響関係が得られた。日常の過剰適応傾向が高いと、SNSの中に肯定的な居場所感覚(Ⅳ. 自己有用感)をもたらす面もあれば(仮説 I-b 支持)、逆に否定的な居場所感覚を喚起することもある(仮説 I-b 棄却; Ⅲ. 自己疎外感, Ⅴ. 戸惑い)。

表7 過剰適応傾向が SNS における居場所感覚におよぼす影響—重回帰分析(ステップワイズ法)—

独立変数: Ⅰ. 自己抑制, Ⅱ. 期待に添う努力, Ⅲ. 人からよく思われたい欲求, 利用頻度		
従属変数: Ⅰ. 心理的充足感	β	
利用頻度	.24	$p = .003$
	$R^2 = .06$	$p = .003$
従属変数: Ⅱ. 自己疎外感		
従属変数: Ⅲ. 被受容感	β	
Ⅲ. 人からよく思われたい欲求	.27	$p = .001$
	$R^2 = .07$	$p = .001$
従属変数: Ⅲ. 被受容感		
従属変数: Ⅳ. 自己有用感	β	
利用頻度	.18	$p = .031$
	$R^2 = .03$	$p = .031$
従属変数: Ⅳ. 自己有用感		
従属変数: Ⅴ. 戸惑い	β	
Ⅰ. 自己抑制	.16	$p = .048$
	$R^2 = .03$	$p = .048$
従属変数: Ⅴ. 戸惑い		
従属変数: Ⅴ. 戸惑い	β	
Ⅰ. 自己抑制	.18	$p = .030$
	$R^2 = .03$	$p = .030$

N=153

ステップワイズ法: 投入基準 $p < .05$; 除去基準 $p > .10$

β : 標準偏回帰係数

Ⅳ. 考察

本研究の目的は、日常生活が抱える心理的不全傾向が SNS 世界での居場所感覚にどのような影響をもたらすかを実証的に解明することにあった。精神疾患から導かれた非現実感傾向(須永, 1996)と学校社会での病理に由来する過剰適応傾向(石津・安保, 2008; 浅井, 2012)を日常の不全として取り上げた。その際、対面世界で心理的不全傾向を強く抱いている者は SNS 世界では肯定的な居場所感覚を形成すると考え、2つの仮説(仮説 I-a, I-b)を設けた。

岸・諸井(2011)が作成した大学生活における居場所感覚尺度の項目を改変して SNS 世界での居場所感覚を測定した。岸・諸井(2011)と同じ3側面が抽出されたが(「Ⅱ. 自己疎外感」, 「Ⅲ. 被受容感」, 「Ⅳ. 自己有用感」), 岸・諸井の「精神的安定感」が拡張された「Ⅰ. 心理的充足感」や、SNS 世界でのまごつきを表す「Ⅴ. 戸惑い」という側面が得られた。SNS における居場所感覚の平均値を見ると、肯定的感覚である「Ⅰ. 心理的充足感」や「Ⅲ. 被受容感」は相対的に強く抱かれていた。これは対面生活でも「精神的安定感」や「被受容感」の平均値が高かったことと対応している(岸・諸井, 2011)。これは、SNS 世界が心地よい空間をもたらしていることになる。しかしながら、興味深いことに、「Ⅳ. 自己有用感」が最も低いことは、SNS 世界が自分の必要性や有益性の感覚をあまりもたらさないことを示している。これは先述した藤野(2017)による知見に対応しているが、この感覚が相手が可視化された存在でないことから生じにくいと考えられる。

非現実感傾向については、先行研究(諸井ら, 2015a)と異なり本研究では単一次元的概念として扱った。非現実感の因子構造については今後も探索すべき課題であるが、ここでは、本研究の目的である仮説 I-a に関する結果を見よう。仮説 I-a は、「Ⅰ. 心理的充足感」では支持されたが、「Ⅱ. 自己疎外感」および「Ⅴ. 戸惑い」

では棄却された。相関値の大きさから一般的には日常的な現実感消失に陥りがちな者は、SNS 世界でも他者との乖離やまごつきを経験することになる。しかし、相関値自体は小さいが、仮説 I-a と一致してそのような者が SNS 世界で満足感を得る面もある。

日常生活における過剰適応傾向に関する因子分析の結果は、先行研究（諸井ら，2015b）で抽出された側面のうち「自己抑制」、「期待に添う努力」、および「人からよく思われたい欲求」は再現され、普遍的であることが示された。しかし、「他者配慮」の側面は抽出されなかった。したがって、過剰適応傾向の基本的構造に関する検討を引き続き行うべきであろう。

過剰適応傾向の3得点に関する平均値比較を試みると、先行研究（諸井ら，2015b）とほぼ同じ傾向が現れ、「人からよく思われたい欲求」が日常場面で最も強いことを示している。

日常の過剰適応傾向が SNS における居場所感覚におよぼす影響に関する仮説 I-b は、「I. 自己抑制⇒IV. 自己有用感」で支持、「III. 人からよく思われたい欲求⇒III. 自己疎外感」および「I. 自己抑制⇒V. 戸惑い」で棄却された。興味深いことに、自分の気持ちや言動を抑え気味にしがちであることを表す「自己抑制」が SNS 世界で2方向の効果をもつ。他者にとって自分が有用な存在であるという実感を得られる反面、どのような振る舞いをすればよいのかまごついてしまうのである。先述したように非対面的世界であるがゆえに自分の本心を隠しながら行動しやすいので、もともと日常世界で自己抑制的傾向をもつ者は SNS 世界では効果的に行動できる。しかしながら、他者の反応が基本的に言語に限定されるので、本当に効果的に振る舞っているのかという迷いが喚起されると考えられる。後者の面は、「III. 人からよく思われたい欲求⇒III. 自己疎外感」についても同様にあてはまる。日常的に他者承認を希求しがちな者は、他者の反応が曖昧である SNS 世界では自分が取り残されている感覚を生じがちになるかもしれないし、SNS 世界に入り込

んでいる人々の一見楽しそうな書き込みなどによって疎外感を抱きがちになると推測される。

いずれにせよ、本研究で用いた2種類の日常的な不全感、肯定的な居場所感覚と否定的な居場所感覚をそれぞれ喚起していたといえよう。

ところで、'11年6月からサービスが開始された「LINE」は、スマートフォン普及によって定着しつつあった SNS 世界を一挙に拡大した（植田，2013）。「1対多数」のコミュニケーションである Facebook や Twitter は、オープンを原則するために利用者に一定以上のリテラシーを要求する。しかし、植田（2013）が指摘するように、「オープンな公共空間だからこそ生まれる刺激や出会いというツイッター独特の楽しさを享受しようとしなない「非公開設定」を行っているユーザーも多い」。このような「1対多数」の SNS がもたらす「SNS 疲れ」が LINE の登場によって一変させる。LINE は、既知の關係に「居心地の良いコミュニケーション」をもたらした（植田，2013）。さらに、スマートフォン1端末に対して1つの ID しか提供されないの「なりすまし」を抑止でき、とりわけ女性には安心感覚を与えた。

以上に述べた植田（2013）による指摘は、本研究の限界を示唆する。つまり、本研究での SNS の利用頻度や SNS における居場所感覚は、「1対匿名多数」、「1対対面生活での仲間」、あるいは「1対1」というような SNS 利用の質的差異を無視して測定された。例えば、①もともと対面接触している人（人々）との關係維持・發展の補完道具として SNS 世界での接触が行われている場合と（黒川ら，2015）、② SNS 世界で新たに接触している人（人々）との關係維持・發展のための営みを区別する必要がある。厳密に言えば、所謂「Read Only」タイプの接触もある。比較すれば、当然ながら①に比べ②のほうが本来の自分とは乖離した SNS 世界での自己開示が行われる可能性が高い。

したがって、利用している SNS メディアの種類や対面世界での対人關係と SNS 世界で構築されている關係との重複の程度などを媒介さ

せながら、日常場面での心理的不全と SNS における居場所感覚との影響関係を今後も検討する必要がある。

〈付記〉

- (1) 本報告は、岸沙耶香、米澤美幸、および永野遥果それぞれが第1著者の下で卒業研究のために立案・実施した研究に基づいている。本研究のために、第1著者が併せてデータ分析を行った。
- (2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS *Statistics version 24.0.0 for Windows* を利用した。

V. 引用文献

- 浅井継悟 2012 日本における過剰適応研究の研究動向 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **60(2)**, 283–294.
- American Psychiatric Association 2013 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 5th ed.* American Psychiatric Publishing. 高橋三郎・大野裕 (監訳) 『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』2014 医学書院
- 藤野千種 2017 SNS を介したインターネット上での心理的居場所と well-being の関連 神戸大学発達・臨床心理学研究, **16**, 14–18.
- 本多麻子 2016 大学生の日常的なポジティブイベントの構成要素—大学生は SNS よりも直接的なコミュニケーションに幸せを感じる— 東京成徳大学研究紀要人文学部・応用心理学), **23**, 103–112.
- 石津憲一郎・安保英勇 2008 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, **56**, 23–31.
- 河野和明 2000 自己隠蔽尺度 (Self-Concealment Scale)・刺激希求尺度・自覚的身体症状の関係 実験社会心理学研究, **40(2)**, 115–121.
- 岸可奈子・諸井克英 2011 女子大学生における居場所感覚—大学と家庭という心理的空間— 生活科学 (同志社女子大学), **45**, 20–28.
- 小林哲郎・池田謙一 2005 携帯コミュニケーションが
つなぐもの・引き離すもの 池田謙一(編) 『インターネット・コミュニティと日常世界』誠信書房 67–84.
- 小島弥生 2016 LINE での友人関係の形成および維持への意思に賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が及ぼす影響 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), **16**, 53–64.
- 黒川雅幸・吉武久美・中山 真・三島浩路・大西彩子・吉田俊和 2015 大学新入生の友人関係における FTF および SNS コミュニケーション 対人社会心理学研究, **15**, 55–62.
- 諸井克英 2004 携帯電話—孤独の迷宮と「親指コミュニケーション」— AERA Mook (96) 『コミュニケーション学がわかる』134–137.
- 諸井克英・足立佑夏・福田絢子 2015a テーマパークに対する意識と行動 (II) —東京ディズニーランドが喚起する非現実感の心理学的働き— 学術研究年報 (同志社女子大学), **66**, 127–138.
- 諸井克英・坂上 舞・野島 彩・岡本有美子 2015b 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機軸の探索—過剰適応傾向、抑うつ傾向、および自尊心との関連— 総合文化研究所紀要 (同志社女子大学), **32**, 71–83.
- 大和田智文・御幸大聖 2017 SNS コミュニケーションの顕在化に関する心理機序について 関西福祉大学研究紀要, **20**, 123–130.
- 総務省 2017 『平成 29 年版情報通信白書—データ主導経済と社会変革—』 <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/index.html> (2018 年 2 月 12 日閲覧)
- 須永範明 1996 非現実感質問紙の作成 心理学研究, **67**, 86–93.
- 高橋尚也・伊藤綾花 2016 SNS 利用における青年の対人関係特性: Twitter と LINE 利用時の行動に注目した検討 立正大学心理学研究所紀要, **14**, 39–50.
- 植田康孝 2013 コミュニケーションを求める大学生気質—無料通話アプリ「ライン LINE」の急拡大— Informatio: 江戸川大学の情報教育と環境, **10**, 13–27.

付表 1 SNS における居場所感覚尺度における残余項目

sns_a_1	SNS では、私自身のプライバシーが守られていない感じがする。
sns_a_10	SNS の利用について、私には共感できないことが多い。
sns_b_1	SNS でだれかと交流していると、私は幸せを感じる。
sns_c_6	SNS を活用することで、誰かに役立つことができる。
sns_c_10	SNS を閲覧していると、私は心から泣いたり笑ったりできる。
sns_d_2	私は、SNS であまり交流したくない。
sns_d_3	SNS の仲間の中で、私が役割を背負わされているものがある。
sns_d_9	SNS の中には、私が支えとなっている人がいる。
sns_d_10	SNS を利用しても、私自身を見つめることができない。
sns_f_3	SNS での交流からは、私には得るものがないような感じがする。
sns_f_6	SNS の中には、私のことを必要とする人がいる。
sns_f_8	SNS では、私は自分らしさを出せない。

付表 2 過剰適応傾向と SNS における居場所感覚との関係—ピアソン相関値—

[SNS における居場所感覚]	[過剰適応傾向]		
	I. 自己抑制	II. 期待に添う努力	III. 人からよく思われたい欲求
I. 心理的充足感	-.03	.05	.06
II. 自己疎外感	.20 <i>p</i> =.013	.24 <i>p</i> =.002	.27 <i>p</i> =.001
III. 被受容感	.03	.04	.11
IV. 自己有用感	.16 <i>p</i> =.048	.07	.07
V. 戸惑い	.18 <i>p</i> =.030	.11	.14

N=153